「語りの会」は果して透析患者を“カタルシス”へと導くか

○市丸 喜一郎[1]，末次 顕宰[1]，大谷 麻岐[1]，椎葉 奈緒美[1]，杉 昌弘[1]，鈴木 勝也[2]

[1]医療法人財団はまゆう会 新王子病院，[2]医療法人財団はまゆう会 腎友会

【キーワード】透析患者，語りの会，カタルシス

私共は「透析患者の語りの会」を実施して 8 年余、その現況と意味を日本透析医会雑誌 30(2)において発表した。今回対象患者（74 歳、男性、透析歴 35 年）より「語りの会」は患者本人を“カタルシス”へ導くのではないかとの書簡をいただいた。

> 患者書簡は[……透析患者は肉体的苦痛はもちろんのこと、障害者としての抑圧された精神的外傷とがあり、これらを他人、身内の者さえにもなかなか理解、共感してもらえない切なさがあります。まして透析という長い医療現場で、ただ患者と医療行為者という立場だけで、そこに理解と共感がなければ真に悲しいことです。「語りの会」の主旨は、医療に携わる人たち、家族、友人に腎機能を失うという体験について理解してもらう情報源になるとあります。私は、もう一つの効果として患者本人の大いなる“カタルシス”もあると思います。インタビュアーは、ご自身で親しく患者の話を聞いてくださり、私たちの心がどれほど和むことかと存じます。特に先生方には日頃、医療行為以外に話せる機会がないので、自分たちの思いを存分に語り聞いてもらえるだけで、それこそまさに臨床心理のように貴重な“カタルシス”に導いてくれるのではないでしょうか。……]であり、患者の了解のもと文脈の一部を変更、割愛している。

「語りの会」は、透析患者と医療者双方を“カタルシス”へ導く意味があると考える。